山梨北中学校

確かな学力の向上を目指す学習指導に関する研究
～学ぼうとする力を高めるための指導を通して～

Ⅰ　研究内容

1　研究目標

学習指導において，生徒の意欲的な態度を育てるために，学級経営を充実させ，基本的な生活習慣や学習習慣を身につけさせることが大切なことを，実践を通して明らかにする。

（1）きめ細かな指導で，基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付ける。
（2）発展的な学習で，一人一人の個性に応じて子どもの力を伸ばす。
（3）学ぶことの楽しさを体験させ，学習意欲を高める。
（4）学びの機会を充実し，学ぶ習慣を身に付ける。
（5）確かな学力の向上のための，特色ある学校づくりを推進する。

2　研究方法・内容

（1）一人一人の個性を大切にする学級経営

一人一人の個性を大切にし，お互いに高めあえるような学級とはどのような学級か，そのような学級を経営するには，どんな方法があるのかを検討する。

ア．学級経営案の作成と検討
イ．Ｑ－Ｕ検査の活用
ウ．スクールカウンセラーの活用
エ．三者懇談での補助簿の利用

（2）基本的な生活習慣と学習習慣の確立

望ましい生活習慣と学習習慣（学校生活の過ごし方，チャイム着席，あいさつ，発言の方法，ノートのとり方，話の聞き方など）について，山梨北中の方針を教師全員で確立（確認）し，どのような方法で，どのように身につけさせていくのか，検討・実践する。

ア．授業規律について，全職員の共通理解と生徒への指導
イ．「学習の手引き」の作成

（3）個に応じた教科指導

個に応じた教科指導の視点は，次に示す４つである。これらは，昨年の各教科の研究結果に基づいており，今年度も継続・見直しを検討する。

ア．評価を生かした指導の改善
　・観点別評価と評定の検討
　・保護者への評価説明会の実施
イ．少人数指導・コース別学習など学習形態の工夫
ウ．個に応じた指導のための教材開発や，学習過程の支援の工夫・改善
エ．学びの機会の充実
　・山北タイムの充実
　・学びの集会の継続
　・朝学習の充実
　・夏休み・冬休みのサポートタイムの充実
　・家庭学習の充実

3　授業実践

○特別活動　大村　隆教諭
「進路情報の理解」

○数学　土屋　憲一教諭・金井　毅教諭
「多項式の計算」

○国語　古屋　成美教諭
「聞く生活を考えよう」

○社会　酒井　理恵子教諭
「国内の地域のちがいに注目して国を調べよう～中国～」

○道徳　鶴田　一路教諭
「かけがいのない生命」

○英語　三森　鉄治教諭・マリサ・シマブクロＡＬＴ
「はじめてのカナダ旅行」

○理科　飯島　聖華教諭
「物質の性質」

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・一人ひとりの個性を大切にし，お互いを高めあえるような学級経営について，学年研究会を中心に検討することができた。また，Ｑ－Ｕ検査を実施することで，学級全体と生徒一人ひとりを客観的に分析でき，１１月の全生徒との教育相談や普段の生徒との関わり方の参考にすることができた。
　学校カウンセラーに講義をしてもらい，教師が自分自身をよく知ることで，生徒とのコミュニケーションがうまくとれる方法について指導を受けた。
・学ぶ意欲を高めるための授業規律について検討し，全職員の共通理解の中で，生徒へ指導することができた。
・各教科の勉強方法をまとめた「学習の手引き」を作成することができた。また，１年生がまだ中学校の勉強方法に戸惑っている夏休み前，学年集会の中で，「学習の手引き」を用いて，各教科の先生から指導してもらうことができた。
・自ら学び自ら考える生徒を育むために，本年度も山北タイムとサポートタイムを実施し，家庭学習の推進，学習支援の有効な時間にすることができた。
・きめ細かな指導をするために三者懇談補助簿を作り，各教科担当から授業への取り組みの様子や指導点を記入してもらい，三者懇談で担任は，生徒と保護者に伝えながら，今後の授業への取り組み方について考えることができた。
・「わかりやすい通信表」を目指し，各教科で観点別評価と評定についての評価規準を明確にするとともに，全職員で評価・評定について検討することができた。また，７月には，保護者に対して評価説明会を実施することができた。
・教師の授業力向上が図れるように，また，指導方法の共通理解を確認するために，全員で指導案検討して授業実践交流を深めることができた。
・効率的に実践研究が進められるように，共通理解しながら研究内容に応じて，学年研究会，教科研究会，全体研究会などの研究活動形態をとることができた。

2　課題

・確実な学力向上を目指して重点目標を設定し，共通実践する。
・読解力や表現力などの国語力の向上について検討する。
・基礎学力の定着，特に家庭学習をしない学力不振者への指導を検討する。
・学力の変容を確認する評価及び手段や方法について情報交換し，より有効な方法について検討する。
・評価・評定について，さらに研究を重ね，評価の信頼性を高めていきたい。

（研究主任　武井　俊文）